

心理学教科書に扱われた P-Fスタディの現状と課題

——特に、教育心理学教科書を中心に——

藤 田 主 一

I. はじめに

P-Fスタディ(The Picture-Frustration Studyの略称)は、日常生活において誰もがごく普通に経験する24種類の比較的軽い欲求不満場面で構成されている心理検査で、1945年にアメリカのSaul Rosenzweigによって公刊された⁽¹⁾。公刊当初は欲求不満研究のための査定用具を目的にしていたが、その後心理診断としての方向性が強まり、また臨床場面での有効性が確認されるに伴ってアメリカはもとより日本、フランス、ドイツをはじめとする複数の文化圏で標準化が行われ広く利用されている⁽²⁾。P-Fスタディは心理検査のなかの投影法(projective method)に属している。投影法は比較的あいまいな絵や図形、文章などの刺激材料に対する被検者の自由な反応からその人の人格像を把握するドラマチックな方法である。同じ投影法でも、ロールシャッハ・テスト(Rorschach Test)やTAT(Thematic Apperception Test)などは検査手続き、つまり実施法や分析法、解釈法が複雑で高度な専門性が要求される。これに対して、P-Fスタディはそれらの手続きがどちらかといえば制限的な枠組みのうえで実施が可能であり、結果の処理法や解釈法についても客観的に行うことができる⁽³⁾。こうした実施者から見た利点や検査上の目的を踏まえてと思われるが、日本では心理臨床におけるさまざまな場面でP-Fスタディは利用価値の高い心理検査のひとつに数えられている。

日本における心理検査利用の現状について、一谷(1987)はこれまでに公表されている調査状況に基づいて多角的に検討し、今後の課題や問題を提起している⁽⁴⁾。それによると、例えば日本臨床心理学会が1971年に報告したデータでは、日本で臨床的によく利用されている心理検査として田中・ビネー式知能検査、WISC、WAIS、Y-G(矢田部-ギルフォード性格検査)、ロールシャッハ・テスト、P-Fスタディ、内田-クレペリン精神作業検査などの名前が挙げられている⁽⁵⁾。またP-Fスタディに限ってみた場合、それは人格特性の①性格・気質特性、②性

格類型、③環境・認知・圧力、④上位自我・価値・自我理想、⑤フラストレーション・コンフリクト・不安、⑥防衛機制・適応機制、⑦自我統制・自我強度などの領域で利用頻度が高いのである。

その後、松原を中心とした筑波大学の研究グループが1981年に全国児童相談所における同様の調査を発表している⁽⁶⁾。それによると、調査の範囲内ではあるが、児童相談所に常備されている心理検査のうちP-Fスタディの常備率がほぼ100%であり、それは知能検査、人格検査、発達検査やその他の心理検査のなかで最高率である。さらに各種心理検査の実施回数(利用率)をみてもP-Fスタディのそれは5.3%で、これはかなりの高頻度であり、おそらく15~20回に1回程度の割合でテスト・バッテリーが組まれているものと予想される。それを裏付けるものとして、児童相談所の心理判定員がよく実施する心理検査のうち人格検査の領域では、P-FスタディがSCT、バウムテスト、ロールシャッハ・テスト、HTP、Y-G、描画法、TATなどを押さえて第一位に位置づけられている点を見逃せない⁽⁷⁾。また相談の内容別では非行(教護)、校内暴力、家庭内暴力、長欠(登校拒否)、学業不振などが中心となっている。

こうした松原らの研究に続いて、中西は1984年に調査対象の心理臨床関係機関を広げて報告している⁽⁸⁾。それは①精神病院関係、②児童治療施設関係、③家庭裁判所関係、④児童相談関係、⑤学生相談関係で、各種の心理検査利用の実態では、P-Fスタディは上記の①③④⑤でしばしば用いられており、その利用頻度を示す重点度得点は①33/100、②11/100、③25/100、④62/100、⑤29/100で、これを見る限り児童相談関係ではかなり多用されていることがうかがえる⁽⁹⁾。その他、地域の児童相談所を個別に調査した報告でも、人格検査の領域では使用されやすいとの指摘が多く⁽¹⁰⁾、いずれにしても心理臨床場面におけるP-Fスタディの価値は高いと思われる。

筆者はP-Fスタディの心理検査としての構成に関心を持ち、これまでにいくつかの角度から研究を重ねてきた⁽¹¹⁾。もちろん筆者がこの心理検査に初めて接したのは一般教育における心理学概論の講義であり、その時に使用した心理学教科書の記述であることは間違いない。当初は単なる知識の吸収が目的であるために、検査の歴史、実施法、処理法、解釈、応用などに関して知るよしもない。まして心理学研究という視点からこの検査に携わる試みもなかったのである。その後、心理検査実習をはじめ関連学習を通し、また新しい方法論からの取り組みに関わって改めてP-Fスタディに魅力を覚えたのも間違いないところである⁽¹²⁾。こうした経緯からP-Fスタディに関する論文、専門書、参考文献、そして関連教科書を渉猟するうちに、創案者であるRosenzweigとP-Fスタディ自体にいろいろな記述例、引用例を見出すとともに決して統一されていないこれらの諸点に疑問を持ったのである。筆者と同様に、特に心理学に接する人が教養としての心理学書あるいは心理学教科書を手にする機会は多いと思われる。そこには、これらの書物からの知識が発展し、さらにより深い専門性を修得していく過程が含まれているのである。さらに、理論的あるいは実的な側面を扱う専門書においては、検査を用いた臨床的応用例が詳

細に組み込まれているのが通常であろう。筆者はこれらの観点から一般心理学あるいは心理学概論に関する教科書に、Rosenzweig ならびにP－Fスタディがどのように扱われているのかを調べてみた(藤田, 1990)⁽¹³⁾。そこに論述されている諸相については本研究のなかでも取り上げられる予定であるが、調査を進めるにしたがい今までに見過ごされてきた両者についての特徴や性質が明らかになったのである。

本研究においては心理学関係教科書の範囲を拡充する意図のもとに、心理学のなかでも類書が多い教育心理学(Educational Psychology)の教科書に焦点をあてることにした。周知のように、教育心理学は教師を志す人および教育に携わる人が是非学んでおくべき講座のひとつである。それは教育の分野における心理学的問題を解明することを目的に、①成長と発達の問題、②学習の問題、③人格と適応の問題、④教育測定と評価の問題などを中心にした専門的知識と教育が教授されているのである。Rosenzweig およびP－Fスタディがこうした目的の教育心理学で扱われるとすれば、Rosenzweig が独自の欲求不満理論からスタートした点を考え合わせて③④の領域に多く登場するものと予測できる。

そこで本研究は、市販されている心理学関係の書籍のなかから主として教育心理学に関する教科書を調査対象に選択する方法を採用した。その際、上記領域のほぼ全般をカバーしていることを前提にしたため、上記領域の一分野のみを取り上げた専門書あるいは専門教科書、また翻訳書は除いた。すなわち発達心理学書、学習心理学書、性格および人格心理学書、臨床心理学書、心理検査書などがこれにあたる⁽¹⁴⁾。ただし書名が「教育心理学」になっていなくても、執筆内容が明らかに教育心理学のかなりの部分を載せている場合には採用した。今回分析の対象にした教科書は、1990年10月31日現在で入手が可能だったものから1980年代に発行された116冊である⁽¹⁵⁾。表1に示した数値は、1980年度から1989年度までの10年間に発行された教科書のうち調査対象になった冊数である。その出版社数は41社に及んだ⁽¹⁶⁾。なお、旧版が新訂あるいは改訂された教科書はその時点をもって初版扱いにしたが、1980年以前に発行された教科書については大著が多数含まれるものの、今回の趣旨からすべてを除いた。

表1 年度別の調査教科書数

年 度	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989
冊 数	11	13	14	7	7	19	17	10	7	11

調査対象の教科書から得られたRosenzweig ならびにP－Fスタディに関する資料は、事前に作成した専用のカードを用いて、関連する事項のすべてにわたって記録、処理された⁽¹⁷⁾。具体的には、Rosenzweig に関しては①出典の有無、②表記法、③記載場所、④記載量、⑤記載内容、⑥P－Fスタディとの関係、⑦執筆担当者など、またP－Fスタディに関しては①出典の有無、

②表記法, ③記載場所, ④記載量, ⑤記載内容, ⑥図版の有無, ⑦公刊年, ⑧執筆担当者などである。本研究においては, それらのなかから主要な諸点を中心に教育心理学教科書に扱われている現状と課題について検討することにした。

II. Rosenzweig の片仮名表記について

1. Rosenzweig の扱われ方

まず, Rosenzweig の人名が教科書の本文または索引欄に記載されているか否かを注意深く調べたところ, 116冊中の62冊 (53.4%) にその名前が認められた。これは一般心理学教科書の42.3%に比較して有意ではないが高い傾向にあった⁽¹⁸⁾。次に, Rosenzweig の表記法つまり Rosenzweig の名前が教科書中に紹介される時, あるいは引用される時にはどのような表記になっているかである。そこで, 記載のあった62冊の教科書において Rosenzweig の片仮名表記例を選出して集計した。表2は表記例を実数値と比率に分けて示したものである。ここに掲げた数値はあくまでも1冊中に1表記を前提にしたものであるため, 1冊中に2表記が認められる場合にはそれぞれに1/2を与えて処理している。ともかく執筆担当者がどの立場に基づいているのかを知ることができる資料である。

表2 Rosenzweig の表記例

表 記 法	実 数	%
ローゼンツワイク	28	45.2
ローゼンツヴァイク	18	29.0
ローゼンツァイク	10	16.1
ローゼンツバイク	4	6.5
ローゼンツワイグ	1	1.6
Rosenzweig (原綴)	1	1.6

表2からも明らかなように, 教育心理学教科書において最も多用されている片仮名表記は「ローゼンツワイク」で62冊中の28冊, 全体の45.2%である。以下, 「ローゼンツヴァイク」の29.0%, 「ローゼンツァイク」の16.1%, 「ローゼンツバイク」の6.5%などの順である。その他「ローゼンツワイグ」「Rosenzweig (原綴)」などの表記が含まれるが, いずれにしても「ローゼン

ツワイク」を半数近くの教科書が採用しているのである。一般心理学教科書の場合はどうだったかという点、「ローゼンツヴァイク」「ローゼンツワイク」「ローゼンツァイク」などの順であり⁽¹⁹⁾、特に第一位と第二位が逆転しているのが対照的である。理由はよくわからない。①一般心理学や心理学概論を執筆する研究者と教育心理学を執筆する研究者とが異なるのか、②執筆時に参照した文献による差なのか、あるいは③執筆者自身の研究結果や経験に基づくのか明らかでないからである。①の試みとして、日本における心理学関係の大きな学会である「日本心理学会」と「日本教育心理学会」に所属する正会員と名誉会員の相互会員率をそれぞれの名簿で確認してみたが、これといった差異があるわけではなかった⁽²⁰⁾。また②③についての情報を得ることが不可能に近いのはいうまでもない。さらに、同一教科書でありながら各章の執筆担当者が異なるために、表2の表記が単独ではなく組合せの形で掲載され統一に至らなかったものが8冊あった点も見逃せない⁽²¹⁾。このように、多くの心理学者のなかで Rosenzweig ほどいろいろな表記例のある学者も珍しいのではないかと思われる⁽²²⁾。

2. Rosenzweig 表記例の周辺

上述されたとおり、教育心理学教科書に扱われた Rosenzweig の名前はその教科書の編者あるいは執筆者の方針にかなりの部分を負っている。したがって、同一人物でありながら同一人物らしからぬ印象を受けてしまうことも否定できないのである。そこで、ここでは Rosenzweig に関わるいくつかの諸点を列記することにした。

(1) Rosenzweig の創案である P-F スタディの日本版作成者（住田勝美・林 勝造・一谷 彊ほか、三京房）は「ローゼンツァイク」を一貫して採用している。それは1956年版の解説書（児童用）や1957年版の解説書（成人用）、1964年版の使用手引（改訂版）、1964年版の「人格理論」、1987年版の解説書（基本手引）とともに共通である。ところが、この表記法は表2に示されたように教科書中では引用のあるなかの16.1%に過ぎなく多用されていない。Rosenzweig を「ローゼンツァイク」と発音し表記した経緯については定かでないが、日本版作成者が関心を寄せ始めたのも確かなようである⁽²³⁾。

(2) P-F スタディの検査用紙上段に書かれている原著者欄であるが、公刊当時の「ローゼンツァイク」の名前が、現在、筆者の手元にある児童用と成人用のそれは「ローゼンツワイク」と印刷されている⁽²⁴⁾。しかし青年用が標準化され公刊されたのを機に児童用、成人用、青年用とも「ローゼンツァイク」に統一され、そこに日本版作成者の見解がうかがえる。

(3) 学会誌に掲載の論文等では、引用人名は原綴をもちいるのが通常である。掲載論文ではないが、日本心理学会発行の「心理学研究」のなかに「ローゼンツワイク氏(米)」の記述がある⁽²⁵⁾。

(4) 代表的な心理学関係の辞典・事典の表記例については以前に公表した⁽²⁶⁾。そこでは7冊の文献が調べられているが、ここでも「ローゼンツワイク」「ローゼンツヴァイク」「ローゼン

ツァイク」の3種類が混在している。なお、教育心理学関係の辞典・事典については本研究の後半に表示したので、その節で述べることにする。

(5) 一般の人名辞典等での扱われ方についても(4)と同様だが、ここで今一度提示してみよう。Rosenzweig 自身ではないが、Rosenzweig という名前の読み方に絞って述べる。①三省堂「固有名詞英語発音辞典」(1969)は「rouzen-tswaig, tsvaix (Ger.)」と読む。②岩波書店「西洋人名辞典(増補版)」(1981)は「ローゼンツヴァイク」と読む。③日外アソシエーツ「西洋人物レファレンス事典」(1984)、「西洋人名よみかた辞典II」(1984)では、比較的多用されている代表的読み方として「ローゼンツワイク」を、異読み(その他の読み方)として「ローゼンツヴァイク」を挙げている。

以上のように、Rosenzweig の片仮名表記に関しては諸説が多く、決して統一されているわけではない。その際に原音に近い表記か慣用的な表記かを判断するのは難しいところである。国語審議会が国語のなかで大きな比重を占めるようになった外来語の表記の仕方をまとめ、試案を公表したのは1990年3月1日だった。翌日の新聞には同審議会の「外来語の表記(案)」の要旨が大きく報道されている。基本的には原音と慣用を尊重する立場をとっており、「仮名を音との対応において用いるという考え方に立つとともに、慣用を尊重」するために、言葉によっては複数の表記を認める緩やかな姿勢である⁽²⁷⁾。その意味からいえば Rosenzweig の発音をきちんと知ることこそ大切な要件といえ、その手続きを通過すれば表2の表記法の実用性がさらにはっきりしてくると思われる⁽²⁸⁾。

III. 教科書における P-F スタディの諸相

1. P-F スタディの位置

ここでは、Rosenzweig 創案の P-F スタディが教育心理学教科書のなかで心理検査の1つとして扱われているか否か等の諸相についてまとめることにする。まず、上記の教科書116冊に何らかの個所で心理検査として紹介のある比率を本文ならびに索引欄を手掛かりに調べた。その結果によると、P-F スタディ(この表記については後述)の検査名を紹介した教科書は82冊で全体の70.7%にあたる。この比率は一般心理学教科書のそれ(70.8%)とほぼ同率で⁽²⁹⁾、これらの数値から P-F スタディが心理学教科書全体に占める位置が7割であるという結論が可能と思われる。記載されている分野は各教科書の編集目的や方針によって異なるが「教育測定・評価」「性格の診断」「人格の診断」「人格検査」「パーソナリティの測定」「パーソナリティの理解」「パーソナリティと教育」「児童・生徒の理解」「心理テスト」など、心理検査や投影法検査の例としての位置づけが中心である。ところが、それ以外に「欲求」「欲求と適応」「適応と不適応」

「適応とパーソナリティ」「フラストレーション」「フラストレーションと葛藤」など Rosenzweig がP-Fスタディを創案するに至った理論から出発した領域にも複数見受けられた。たとえば、児童・生徒(実際には人間全般の場合が多い)のフラストレーションの状況(ここで Rosenzweig の理論である内的・外的な欠乏, 喪失, 葛藤の種類とその説明が加えられる)からフラストレーション耐性あるいは適応機制へ話題が展開し, 適応機制的なかの攻撃機制をいわゆる外罰・内罰・無罰(1987年版以降は他責・自責・無責に改正)の方向性で捉える心理検査(測定用具)に Rosenzweig のP-Fスタディが取り上げられるというものである。これらは先述した教育心理学の領域における登場仮説とよく符合している。ただその際に, フラストレーション理論の説明と Rosenzweig の名前, P-Fスタディの紹介という筋道は必ずしもスムーズというほど十分ではない。その1つの現れかもしれないが, Rosenzweig の名前があった62冊(全体の53.4%)のうち同時にP-Fスタディの作成者として紹介しているものは41冊(66.1%)に過ぎないのである⁽³⁰⁾。

さて, 82冊のなかに示された『P-Fスタディ』の表記法であるが, これも本文ならびに索引欄からまとめた。表3はそれらの表記法を特徴的な類型に分けて示したものである。表3からも明らかなように, 『P-Fスタディ』の表記例は「P-Fスタディ」「絵画欲求不満検査・テスト(絵画フラストレーション検査・テストを含む)」「PFT」「PFテスト」の4種類である。これらの表記例が教科書に引用される場合, 単独で引用している教科書は「P-Fスタディ」の19.5%, 「絵画欲求不満検査・テスト」の8.5%, 「PFT」の4.9%で, これは全体の32.9%にあたる。それ以外はすべて2種類の表記の並列である。なかでも「P-Fスタディ」と「絵画欲求不満検査・テスト」との並列が最も多く全体の56.1%を占めている。並列の仕方は「P-Fスタディを主項目に掲げ, 絵画欲求不満検査・テストともいう」の場合と, その反対の立場のいずれかである。その他の組合せについては表3のとおりである⁽³¹⁾。ところで, 並列といっても個々の表記数はかなりの偏りがあり, 表記率からいうと「P-Fスタディ」が75.6%, 「絵画欲求不満検査・テスト」が同じく75.6%, 「PFT」が12.2%, 「PFテスト」が3.7%となり, 『P-Fスタディ』の表記法では「P-Fスタディ」と「絵画欲求不満検査・テスト」が二大双壁といえることができる。

もともとの『P-Fスタディ』が三京房から公刊された時の名称は「絵画—欲求不満テスト(Rosenzweig P-F Study 日本版)」で, 当初は「絵画—欲求不満テスト」と「テスト」を前面に出し, P-Fスタディは別称扱いだった。検査用紙, 記録票の表紙もこのように印刷されていたが, のちに利用者の印象や検査の内容を知られないための配慮のもとにP-Fスタディの名称を前面に押し立てたようである。それを引き継いだ形で, 現在の検査用紙の表紙は「P-Fスタディ(Rosenzweig Picture Frustration Study 日本版)」になっている。先述のように, 本来の目的が Rosenzweig の欲求不満理論を検証する用具であれば「P-Fスタディ」とするのが正式な

表3 P-Fスタディの表記例

表 記 法	冊 数	%
P-Fスタディ 絵画欲求不満検査・テスト (並列)	46	56.1
P-Fスタディ (単独)	16	19.5
絵画欲求不満検査・テスト (単独)	7	8.5
PFT 絵画欲求不満検査・テスト (並列)	6	7.3
PFT (単独)	4	4.9
PFテスト 絵画欲求不満検査・テスト (並列)	3	3.7
PFテスト (単独)	—	—

(注) 「絵画欲求不満検査・テスト」のなかには「絵画フラストレーション検査・テスト」が含まれている。

のだろうが⁽³²⁾、教科書においては知識と教養の修得が目的と考えれば、ある程度の実体が推測できるように「絵画欲求不満検査・テスト」を並列しているものと思われる。

教科書本文中におけるP-Fスタディの記載量と記載内容を上記82冊をベースに調べた。それによると、検査の構成（たとえば理論的背景、作成者、絵画刺激の数、反応の方法など）や解釈基準（たとえばアグレッションの方向とアグレッションの型についての解説、表示など）等を複数行にわたり説明しているものが48冊（58.5%）、上述の分野や領域で単にP-Fスタディの名称のみが紹介されているに過ぎないものが34冊（41.5%）であった⁽³³⁾。記載の内容は、「欲求不満（フラストレーション）反応を調べる」というごく単純明快なものから「①Rosenzweigの理論、②漫画風の刺激図形の意味、③刺激図形の挿入、④吹き出し部分への反応の仕方、⑤反応文の処理法、⑥簡単な解釈」に至るまで実に多彩である。ところで、P-Fスタディの公刊年を本文中に記述している教科書が12冊（14.6%）あった。1945年が5冊、1944年が3冊、1938年、1947年、1948年、1956年がそれぞれ1冊である⁽³⁴⁾。これらの年代はもちろんRosenzweigの原

版の公刊年を意図しているものだが、少なくとも1956年は日本版（成人用）の公刊年である。

2. P-Fスタディ図版の種類

P-Fスタディは検査の技法からすれば投影法に属する一種であるため、比較的あいまいな刺激が存在する。それが絵画刺激（登場人物の顔の表情は抑えている）と言語刺激であることは前述したとおりである。そこでP-Fスタディ名が本文中に紹介されている82冊のなかで、同時にP-Fスタディ図版も掲載されている比率を調べた。その結果、25冊（30.5%）に何らかの図版があり残りの57冊（69.5%）には存在しなかった。また調査した116冊の教科書にP-Fスタディの名称と図版の両方が紹介、記載されている割合は21.6%であった⁽³⁵⁾。

では具体的な図版であるが、25冊のなかに33枚の図版が複数掲載され⁽³⁶⁾、その数は19種類に及んでいる。表4はそれらをまとめたものである。表4に示されたように最多掲載図版は児童用場面1の8枚と例題の5枚である（図1）。表中のその他は、児童用では場面2、場面6、場面

表4 P-Fスタディの掲載図版例（図版数）

児 童 用		成 人 用		そ の 他
場 面 1	8	場 面 1	2	オリジナル 2
例 題	5	例 題	1	
場 面 8	2	場 面 6	1	
場 面 22	2	その他	3	
そ の 他	7			

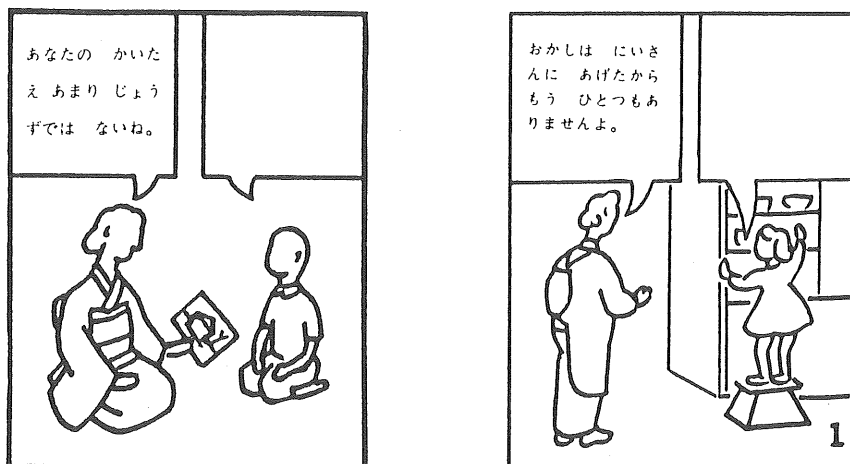


図1 最多掲載図版（左：児童用例題，右：児童用場面1）

11, 場面19, 場面21, 場面23, 場面24の各1枚, 成人用では場面7, 場面8, 場面10の各1枚である。一般心理学教科書に成人用が多かったのに対し⁽³⁷⁾, 教育心理学教科書では圧倒的に児童用が多数を占めている。どの図版を利用するのは全く執筆担当者の自由裁量の範囲であるが, 教育心理学教科書で児童用が多い理由のひとつに, 教科の対象が児童・生徒であるということとも無関係ではないだろう。ところで, P-Fスタディの掲載図版に類似のオリジナル図版を使用している教科書が2冊みられた⁽³⁸⁾。実際 of 原図版を載せるよりはオリジナル図版を載せる方が良心的という執筆者の考えの現れかもしれないが, 日常生活での欲求不満場面は無限といっていだらうから, その図版の言語刺激と絵画刺激が示す意味や, また反応した場合のパターンや解釈基準なども合わせて示した方が, より一層良心的といえるのかもしれない。いずれにしても, オリジナル図版は新しい試みなためP-Fスタディ原版と比較して検討してみる必要があると思われる⁽³⁹⁾。

3. 投影法とP-Fスタディ

教育心理学に限らず一般心理学やその他の応用心理学の教科書には, いわゆるパーソナリティ検査が必ずといってよいほど登場する⁽⁴⁰⁾。投影法は質問紙法, 作業検査法と並んでそのなかでも大きな位置を占めている。それでは教育心理学教科書にはP-Fスタディのほかどんな投影法の検査が引用されているのだろうか。そこで, まず116冊の教科書のうち何らかの投影法検査が含まれているか否かを調べたところ, 96冊(82.8%)にそれが認められた。延べの引用数は合計470であった。表5は引用率の高い順に列挙してまとめたものである。96冊をベースにすると, ①ロールシャッハ・テスト(96.9%), ②TAT・CAT(95.8%), ③P-Fスタディ(85.4%), ④SCT(77.1%)が「投影法の四天王」ということができる。SCTとバウムテスト(26.0%)以下にかなりの差が存在するからである。表5に載せたものの以外では, 引用率の高い順に示すと描画法, フィンガーペインティング, 箱庭法(テスト), 心理劇, ゲシュタルトテスト, モザイクテストなどで, 表5のロールシャッハ・テスト以下を含めると合計で21種類に及んでいる。

このように, 引用率からみた投影法の現状は上述のとおりだが, 次に引用の順位を調べたところ表6の結果が得られた。表6から直視できるように, ①ロールシャッハ・テストは第1位(82.8%)に引用されるのが圧倒的に多い。②TAT・CATは第2位(78.2%)が中心で4位までには必ず引用される。③P-Fスタディは第3位(54.9%)が過半数だが3位以下で9割近くを占める。④SCTは第4位(47.3%)が中心だが3位と4位で8割近くになる。このことから, おそらく③P-Fスタディと④SCTとはクロスする可能性が残されるが, こうした引用順位と先の引用率を総合すると, 投影法の典型的な記述ルートは「ロールシャッハ・テスト」→「TAT・CAT」→「P-Fスタディ」→「SCT」のようである⁽⁴¹⁾。これは先述した日本における心理臨床関係機関での常備率や使用頻度と必ずしも一致していないが, 心理臨床家の目

表5 投影法の引用例と引用率

投 影 法	引 用 数	引用率 (%)
ロールシャッハ・テスト	93	96.9
TAT・CAT	92	95.8
P-Fスタディ	82	85.4
SCT	74	77.1
バウムテスト	25	26.0
人物画テスト	20	20.8
言語連想検査	17	17.7
HTP	15	15.6
ゾンディテスト	15	15.6
その他	37	—

表6 4つの投影法の引用順位

引用順位	ロールシャッハ・ テスト(93)		TAT・CAT(92)		P-Fスタディ(82)		SCT(74)	
	冊 数	%	冊 数	%	冊 数	%	冊 数	%
第 1 位	77	82.8	3	3.3	7	8.5	5	6.8
第 2 位	8	8.6	72	78.2	3	3.6	6	8.1
第 3 位	2	2.2	14	15.2	45	54.9	21	28.4
第 4 位	3	3.2	3	3.3	18	22.0	35	47.3
第 5 位	3	3.2	—	—	9	11.0	4	5.4
そ の 他	—	—	—	—	—	—	3	4.0

表7 辞典・事典に扱われたRosenzweigとP-Fスタディの諸相

No.	辞典, 事典の 名称	代 表 者 (編者)	発 行 所	初 版 発行年	Rosenzweig の 表記法	P-Fスタディ の表記法	出 典 事 項
1	教育心理学事典	牛島 義友	金 子 書 房	1956	ローゼンツヴァイク	絵画フラストレーション・テスト	プロジェクト・テスト
2	教育学事典	海後 宗臣	平 凡 社	1956	ローゼンツヴァイク	PFT P-F Study	P.F.T フラストレーション
3	教育相談事典	桂 広介	金 子 書 房	1966	ローゼンツヴァイク	PFT P-Fスタディ (P-F Study) 絵画欲求不満テスト 住田絵画欲求不満テスト	PFT フラストレーション フラストレーション ・トレランス プロジェクト・ テクニック
4	教育心理学新辞典	牛島 義友	金 子 書 房	1969	ローゼンツヴァイク	P-Fスタディ 絵画・欲求不満テスト	フラストレーション 攻撃仮説 フラストレーション ・トレランス P-Fスタディ
5	児童学事典	松村 康平	光 生 館	1972	ローゼンツヴァイク ローゼンツヴァイク ローゼンツヴァイク ローゼンツヴァイク	P・Fテスト PFT 絵画欲求不満テスト	欲求不満 フラストレーション 耐性 内・外・無罰反応 二重人格 投射法 問題場面テスト
6	教育心理学小辞典	古賀 行義	協 同 出 版	1972	ローゼンツヴァイク	P-Fスタディ 絵画欲求不満テスト PFT	投影法 P-Fスタディ
7	現代教育用語辞典	天城 勲	第一法規	1973	ローゼンツヴァイク ローゼンツヴァイク	PFT	PFT
8	教育評価事典	鈴木 清	第一法規	1975	ローゼンツヴァイク	P-Fスタディ 絵画フラストレーション・スタディ	投影法 性格
9	新・教育心理学事典	依田 新	金 子 書 房	1977	ローゼンツヴァイク	絵画フラストレーション・テスト P-Fスタディ	性格検査 性格研究法 投影法 フラストレーション
10	教育学大事典	細谷 俊夫	第一法規	1978	ローゼンツヴァイク	P-Fスタディ	葛藤 投影法
11	教育・臨床心理学辞典	小林 利宣	北大路書房	1980	ローゼンツヴァイク ローゼンツヴァイク ローゼンツヴァイク	P-Fスタディ P-Fテスト	P-Fスタディ フラストレーション 外罰型・内罰型・無 罰型 知能 人名欄
12	教育心理学の基礎知識	河合 伊六	福村出版	1981	—	P-Fスタディ	人格 投射法
13	新教育心理学基本用語辞典	小口 忠彦	明治図書	1982	ローゼンツヴァイク	—	フラストレーション 欲求不満の耐性
14	教育心理学用語辞典	岸本 弘	学 文 社	1984	ローゼンツヴァイク	絵画欲求不満検査 PFT P-F Study	絵画欲求不満検査 外罰型と内罰型 欲求不満耐性
15	多項目教育心理学辞典	辰野 千寿	教育出版	1986	ローゼンツヴァイク	絵画欲求不満検査 P-F Study PFT P-Fテスト	絵画欲求不満検査 欲求不満攻撃仮説 人名欄
16	現代教育評価事典	東 洋	金 子 書 房	1988	ローゼンツヴァイク	P-Fスタディ 絵画欲求不満テスト	パーソナリティの評 価 P-Fスタディ 人名欄
17	評価・診断心理学辞典	本明 寛	実務教育出版	1989	ローゼンツヴァイク	P-Fスタディ 絵画欲求不満テスト	ローゼンツヴァイクの 理論 欲求不満 欲求不満耐性 自己防衛型 略画検査 P-Fスタディ 人名欄

的と教科書の目的との違いを考える以外にはないように思われる。

4. 辞典・事典とP－Fスタディ

ここで、教育心理学に関連した辞典・事典をととして Rosenzweig ならびにP－Fスタディの記述内容を抽出することにした。教育心理学に関連する諸科学は多い。そこで、一応のところ教育心理学を中心に表7に記載した17種類の辞典・事典などを選び出し、それぞれについて①Rosenzweigの表記法、②P－Fスタディの表記法、③出典事項などを、主として索引欄と本文中の関連事項を手掛かりに断片的ではあるが列挙してみた。まず Rosenzweig の表記法は「ローゼンツヴァイク」「ローゼンツワイク」「ローゼンツァイク」「ローゼンツワイグ」「ローゼンツウェイク」「ローゼンツバイク」の6種類である。またP－Fスタディの表記法は「絵画フラストレーション・テスト」「PFT」「P－F S t u d y」「PFスタディ」「住田絵画欲求不満テスト」「絵画欲求不満テスト」「絵画－欲求不満テスト」「P・Fテスト」「P－Fスタディ」「絵画フラストレーション・スタディ」「P－Fテスト」の11種類である。ただし類似した名称をまとめると4種類に相当する。これらの表記法は発行所（出版社）によって異なり、また発行所のなかでも混在している。そして、Rosenzweig ならびにP－Fスタディの出典事項は、2種類の傾向はあるものの実に多くの用語に支えられていることがわかる。基本的な事項を調べる場合に辞典・事典からの情報は特に意味が深いと思われるので、これからは何らかの統一的方向性が望まれるところである⁽⁴²⁾。

IV. 要 約

本研究は心理学教科書、特に教育心理学教科書に引用、記述されている投影法による心理検査のうち、Rosenzweig が独自の欲求不満理論から創案したP－Fスタディに焦点をあてた。すなわち1980年から1989年までの10年間に市販されている教育心理学教科書のなかから、可能な限り収集した116冊に所載の内容について、主として①Rosenzweigの片仮名表記、②P－Fスタディの位置と表記、③P－Fスタディ図版の種類、④投影法とP－Fスタディ、⑤辞典・事典とP－Fスタディの観点から分析検討を加えた。これは筆者が一般心理学教科書について以前に発表した「心理学教科書とP－Fスタディ」の研究を補うものである。得られた主要な結果は以下のとおりである。

(1) Rosenzweig の片仮名表記は5種類あり、なかでも「ローゼンツワイク」の表記法が5割近くを占めて第1位である。

(2) P－Fスタディが教育心理学教科書に引用される比率はおよそ70%で、その名称は「欲求と欲求不満（フラストレーション）」と「心理検査」という2つの大きな分野にみられる。また、

その表記法は「P-F スタディ」と「絵画欲求不満検査」に大別される。

(3) 教育心理学教科書に掲載されるP-F スタディ図版は児童用が多い。

(4) 投影法のなかに紹介される場合、P-F スタディはロールシャッハ・テスト、TAT・CATについて第3位である。

(5) 辞典・事典に登場するRosenzweigとP-F スタディについての諸相は、それぞれの書籍間で相互関連性がみられない。

このような諸結果は、これからRosenzweigならびにP-F スタディについて研究、記述するときの貴重な資料になるものと思われる。今後はこれらの知見に基づき、さらに研究を発展させて行きたいと考えている。

〈注〉

(1) 成人用が1945年に公刊された時の正式名称は「欲求不満の際の反応を測定するための絵画連想研究(The Picture-Association Study for Assessing Reactions to Frustration)」である。

(2) 日本においては1955年に児童用、1956年に成人用、1987年に青年用がそれぞれ標準化され、いずれも三京房(京都)から公刊されている。

(3) P-F スタディの欲求不満場面は2つの刺激材料、つまり漫画風の絵画刺激と左側人物の言語刺激からなる。全24場面は大きく自我阻害場面と超自我阻害場面に二分できる。各場面に対する反応はアグレッションの方向(他責的、自責的、無責的)とアグレッションの型(障害優位、自我防衛、要求固執)、社会適応度指標GCR(Group Conformity Rating)、反応転移などを総合して処理、解釈する。

(4) この研究は日本臨床心理学会や筑波大学の研究グループ、地域の児童相談所などが中心になって、全国の児童青少年関係の機関や施設における心理検査の利用実態や問題点を調査した報告に基づいている。

(5) WISC: Wechsler Intelligence Scale for Children.

WAIS: Wechsler Adult Intelligence Scale.

(6) 筑波大学心理テスト研究会。この研究は以下の文献にまとめられている。

松原達哉・荒川優子・内田賢子・江田遵子・細谷和恵(1981) 全国児童相談所における心理検査の利用の実態と問題(1)(2)(3), 心理測定ジャーナル, Vol.17, No.4, No.5, No.12.

(7) SCT: Sentence Completion Test.

HTP: House-Tree-Person Test.

(8) この研究は以下の文献にまとめられている。

中西真由美(1984) 心理臨床家の心理テスト利用の実態, 心理測定ジャーナル, Vol.20, No.4.

(9) 重点度得点: 「重点的に行う」を2点, 「時々行う」を1点, 「行わない」を0点として各心理検査の粗点を算出し, 回答者すべてが「重点的に行う」とした場合の粗点(2点×全回答者数)を100として, 各検査の粗点を換算したもの。

(10) たとえば以下の研究がある。

柏女霊峰(1980) 児童相談所における心理検査の活用—千葉県市川児童相談所—, 心理測定ジャーナル, Vol.16, No.2.

松原達哉(1984) 千葉県内児童相談所における心理テストの利用, 心理測定ジャーナル, Vol.20, No.3.

梅本浩靖(1986) 石川県内児童相談所における心理テスト利用の現状, 心理測定ジャーナル, Vol.22,

No.2.

- (11) 筆者の研究成果については本稿末に「付録」として一括掲載した。
- (12) 当初は高橋秀和（横浜市中央児童相談所心理判定員）との共同研究が契機になった。
- (13) 1980年から1989年までの10年間に発行された一般心理学および心理学概論の教科書 130 冊を調べたものである。
- (14) 本来、教育心理学に関係するものであればこの種の書籍も検討されるべきだろうが、本研究の目的が通常の教育心理学教科書に限定しているためである。
- (15) 分析の対象になった 116 冊の教科書名、発行所、発行年については本稿末に「引用文献」として一括掲載した。教科書の入手にあたっては筆者の個人的な蔵書のほかに、主として東京都、埼玉県内の大学等の図書館蔵書を閲覧、利用した。その機関名はつぎのとおりである。
- 城西大学図書館、文教大学図書館、大東文化大学図書館、法政大学図書館、共立女子大学図書館、明治大学図書館、日本大学文理学部図書館、日本大学経済学部図書館、日本大学法学部図書館、埼玉大学図書館、東京国際大学図書館、早稲田大学図書館、(財)安田生命社会事業団ライブラリー、国立国会図書館。
- (16) 具体的な出版社名は「引用文献」欄を参照されたいが、教科書発行数の多い出版社は①福村出版の19冊、②学術図書出版社の15冊、③八千代出版の13冊などである。
- (17) 専用カードは表Aの様式のものである。カード内の項目は前回調査時のものを改正している。
- (18) 一般心理学教科書では 130 冊中の 55 冊に Rosenzweig の名前が存在している ($\chi^2 = 3.05$ $df = 1$ $0.05 < p < 0.1$)。
- (19) 表記例と出現比率はつぎのとおりである。

表B Rosenzweig の表記例

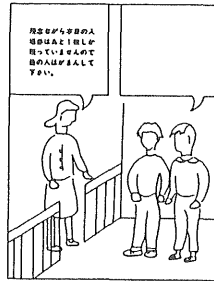
表 記 法	実 数	%
ローゼンツヴァイク	29	52.7
ローゼンツワイク	12	21.8
ローゼンツアイク	4	7.3
ローゼンツワイグ	3	5.5
そ の 他	7	12.7

- (20) 1988年度の名簿による。「日本心理学会」の正会員と名誉会員4,462名のうち、「日本教育心理学会」の会員でもある者は1,984名 (44.5%)、「日本教育心理学会」の正会員と名誉会員3,721名のうち、「日本心理学会」の会員でもある者は1,995名 (53.6%) である。
- (21) 教育心理学に限らず最近の心理学関係教科書は、より高度な専門性が反映されることと、単著出版よりも商業ベースという意味かもしれないが、複数の執筆者が共著の形で出版するための影響と思われる。
- (22) たとえば「体格と性格」研究で有名なドイツの Kretschmer, E. の片仮名表記が「クレッチマー」か「クレッチメル」かの2種類であるのはよく知られている事実である。

表A 記録用の専用カード

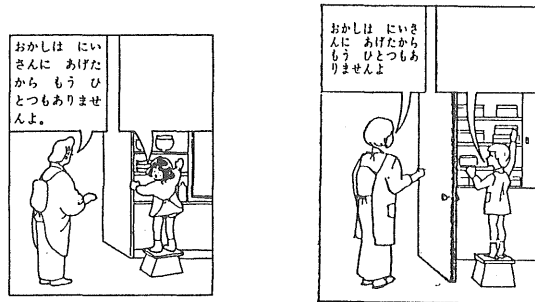
・教科書名(教育心理学) _____	
・編著者 _____ 編 編著 著 共著	
・出版社 _____	・初版年月日 _____ 年 ____ 月 ____ 日
・総ページ数 _____	
・Rosenzweig の名前の有無 有 無	・人名索引に 有 無
・ " の読み方 (1) _____ (2) _____	
・ " 記載場所 (1)' _____ (2)' _____	
・ " 記載行数 (1)' _____ (2)' _____	
・ " P-Fスタディの作者と紹介している	Yes No
・P-Fスタディ 名前の有無 有 無	・事項索引に 有 無
・ " 記載場所 (1) _____ (2) _____	
・ " 記載行数 (1)' _____ (2)' _____	
・ " 記載の仕方	<input type="checkbox"/> 「P-Fスタディ」 <input type="checkbox"/> 「P F T」 <input type="checkbox"/> 「絵画欲求不満検査(テスト)」 <input type="checkbox"/> 「P-Fテスト」 <input type="checkbox"/> 両方の並列 _____
・投影法の引用の種類	
<input type="checkbox"/> ロ・テスト <input type="checkbox"/> T A T <input type="checkbox"/> S C T <input type="checkbox"/> P-F その他	
・P-Fスタディの図版の有無 有 無 オリジナル	
<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="font-size: 3em; margin-right: 10px;">{</div> <div> 児童用 例 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 成人用 例 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 青年用 例 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 </div> </div>	
・P-Fスタディの内容説明 有 無	・発表の年 _____ 年 無
・Rosenzweig の執筆者 _____	・P-F の執筆者 _____
○備考 Rosenzweig	P-Fスタディ

- (23) 筆者のこの提起に対して、1990年10月12日に開催された日本教育心理学会（大阪大学）の研究発表分科会（人格11：パーソナリティ・テスト，座長：多田建治・一谷 彊）の席上，一谷から「藤田の指摘が引き金になり，日本ではいろいろな片仮名表記がみられるのでP-Fスタディ日本版作成者の中心である林 勝造を通して，Rosenzweig 自身に“Rosenzweig”を何と読んでほしいか，を発音記号で示してほしいとの問い合わせを行っている」旨の発言があった。これは筆者にとって大きな成果であり前進であった。
- (24) P-Fスタディ検査用紙に「ローゼンツワイク」とあるのは印刷時のミスとは考えられない。おそらく日本版作成者（改訂者）か出版社かの意思であろうと思われる。
- (25) 「心理学研究」第59巻第4号（1988）の258ページ（会報）22行目。
- (26) 筆者の「心理学教科書とP-Fスタディ」（1990）のP. 132参照。①平凡社「心理学事典」「新版心理学事典」，②誠信書房「心理学辞典」，③有斐閣「心理学小辞典」，④協同出版「心理学小辞典」，⑤岩波書店「心理学小辞典」，⑥北大路書房「心理学辞典」がそれである。
- (27) 原音や綴りになるべく近く書き表そうとする場合には外来音に対応できる。たとえば「バイオリン」「ヴァイオリン」ともに可能であり，また「ヴェネチア」「ベネチア」「ヴェネツィア」「ベネツィア」の書き方がともに許される。
- (28) 筆者自身，複数の語学の専門家に発音してもらい片仮名表記を試みたが，専門家の間でも意見が分かれ，実際は五里霧中なのが現状である。
- (29) 130冊の92冊である。
- (30) 一般心理学教科書ではRosenzweig=P-Fスタディの関係を明記しているものは55冊中の27冊（49.1%）である。教育心理学教科書の場合はそれに比較して高率だが有意な差ではない（ $\chi_0^2=3.48$ df=1 $0.05 < p < 0.1$ ）。
- (31) 教科書によっては「Picture Frustration Study」の正式名（英文）を加えたり，略称としての「PFS」を載せているものも見受けられた。
- (32) 林 勝造(1985)はP-Fスタディの表記について，なぜP-Fテストといわないかとの理由をRosenzweig 自身の言葉を引用して，「検査は元来，一定の標準によって個人の位置を決定するものであって，個人の成績を判定すべき外的標準を具えているが，P-Fスタディには本来このような標準を必要としないから，いわゆる“検査”ではない。P-Fスタディにおいては各個人毎の反応を母集団として，これら反応間の内的一貫性をもとめることによって個性を理解しようとするものである。したがって“検査”の必要条件である標準をかならずしも重視しないので，これを“検査”というのは妥当でない」と述べている。一谷 彊も注(23)と同じ学会の席上で，「P-Fスタディはフラストレーション研究のための査定用具を目的にしているので，本来Study（スタディ）であることが望ましく，テストや性格分類に供される目的の類は正しい使用方法とはいえない」と発言している。
- (33) 一般心理学教科書の場合は複数行説明が39/92（42.4%）冊で，教育心理学教科書の方が多く説明している（ $\chi_0^2=4.52$ df=1 $p < 0.05$ ）。
- (34) Rosenzweig の児童用の公刊年は1948年である。
- (35) 一般心理学教科書は23.1%である。
- (36) 一冊に4図版掲載の教科書があった。
- (37) 最多掲載図版は成人用例題と場面1の各7枚である。
- (38) たとえば次のようなものである。



図A オリジナル図版の例 (引用文献9)

- (39) その他、日本版を掲載しているのだが、原版と異なり顔の表情を加え本来の意図と異なるものもみられた。



図B 原図版を变形した例 (左：引用文献15, 右：辞典・事典 No.8)

- (40) 学生が心理学に対して感じる魅力のひとつに、「性格」の講義や「性格検査」のパフォーマンスがあるらしいことによる。これについて、1990年9月28日の日本応用心理学会（茨城大学）で、高嶋正士・藤田主一・林 倫子が「女子学生のいづく心理学の魅力」というテーマで研究発表している。
- (41) この順位の意味はよくわからないが、いくつかの可能性は思いつくかもしれない。①世界的な知名度、②研究論文の数、③研究者の数、④公刊年の早さ（ロールシャッハ・テスト：1921年，T A T：1935年，P－Fスタディ：1945年，S C T：1940年代？），⑤検査の複雑性、⑥利用価値、⑦応用範囲、⑧専門性、⑨保険点数（ロールシャッハ・テストとT A Tは250点，P－FスタディとS C Tは150点）、⑩検査のドラマチック性，など。
- (42) 秦 一士（日本版作成者）は筆者への私信のなかで、青年用作成の時にRosenzweigの日本語表示を「ローゼンツァイク」で統一したらどうかという話し合いがもたれたこと、秦が関係している心理学辞典の改訂にあたって「ローゼンツァイク」で統一するように申し出たことを伝えてきている。

〈引用文献〉

- 1) 安倍北夫・古谷妙子 編著 「教育心理学入門」 1985 ブレーン出版
- 2) 東江平之・前原武子 編著 「教育心理学—コンピテンスを育てる」 1989 福村出版
- 3) 安藤延男 編著 「教育心理学入門」 1982 福村出版
- 4) 青柳 肇・瀧本孝雄・矢澤圭介・清水弘司 編著 「教師のための教育心理学」 1985 福村出版
- 5) 浅田隆夫・福屋武人 編 「発達と教育の心理学」 1986 学術図書出版社
- 6) 東 洋 著・柏木恵子 編 「教育の心理学」 1989 有斐閣

- 7) 東 正 責任編集 「教育心理学要説—ミニマム・エッセンシャルズとその現代的課題」 1982 川島書店
- 8) 馬場道夫・吉岡 伸 編著 「人間教育の心理学」 1984 第一法規
- 9) 堂野佐俊・堂野恵子・中谷 隆ほか 著 「教育心理学要論」 1985 北大路書房
- 10) 江川玖成・根本橋夫 編著 「教育心理学」 1983 福村出版
- 11) 江見佳俊・柴山茂夫・酒井亮爾 編著 「教育指導の心理学」 1981 学術図書出版社
- 12) 遠藤辰雄 編 「教育心理学」 1980 学術図書出版社
- 13) 藤井悦雄 編 「ひとの成長と教育」 1985 学術図書出版社
- 14) 福岡教育大学心理学研究室 編 「教育心理学図説」 1980 北大路書房
- 15) 福屋武人 編 「学生のための教育心理学」 1985 学術図書出版社
- 16) 福屋武人 編 「教職課程の教育心理学」 1987 学術図書出版社
- 17) 福沢周亮 編 「現代教育心理学」 1982 教育出版
- 18) 原野広太郎 著 「教室で生きる教育心理学」 1981 学陽書房
- 19) 畠山 忠 編著 「教育心理学」 1984 学術図書出版社
- 20) 八田武志 著 「教育心理学」 1987 培風館
- 21) 肥田野 直 編著 「教育心理学の展開」 1984 北樹出版
- 22) 平出彦仁 編著 「学校教育心理学」 1985 八千代出版
- 23) 北海道教職課程研究会 編 「教育心理学」 1984 学術図書出版社
- 24) 堀ノ内 敏・岩井勇児 編著 「教育心理学」 1980 福村出版
- 25) 堀内英雄 編 「教育心理学入門」 1985 学術図書出版社
- 26) 堀内敏夫・瀬川良夫 編著 「統合的教育心理学」 1982 八千代出版
- 27) 池田一郎 編著 「教育心理学概論」 1982 建帛社
- 28) 池田貞美 編著 「教育実践心理学」 1986 北大路書房
- 29) 稲越孝雄 編著 「人間性の教育心理学」 1980 協同出版
- 30) 石田恒好・阿部 勲 編著 「教育心理学」 1983 協同出版
- 31) 磯貝芳郎 編著 「教育心理学の世界」 1981 福村出版
- 32) 伊藤隆二 編著 「新・教育心理学」 1988 八千代出版
- 33) 伊藤隆二・坂野 登・鐘 幹一郎 編 「教育心理学を学ぶ(新版)」 1988 有斐閣
- 34) 神保信一 編 「教育心理学」 1980 小林出版
- 35) 梶田正巳 編著 「授業の教育心理学」 1982 黎明書房
- 36) 亀井一綱・島田昌幸・平出彦仁・栗原敦雄ほか 共著 「現代教育心理学」 1982 八千代出版
- 37) 神谷育司・梶田正巳・杉江修治 編 「テキスト 教育心理学」 1985 福村出版
- 38) 加藤義明・塚田紘一 編著 「図説教育心理学入門」 1987 建帛社
- 39) 加藤義明・中里至正 編著 「入門教育心理学(基礎心理学Ⅲ)」 1988 八千代出版
- 40) 河合伊六・池田貞美・祐宗省三 編著 「現代教育心理学の展開—研究トピックスとその動向」 1981 川島書店
- 41) 河合伊六 編 「教育心理学概論」 1985 学術図書出版社
- 42) 河合伊六・松山安雄 編著 「現代教育心理学図説」 1989 北大路書房
- 43) 川床靖子・大山俊男 編 「教育心理学入門」 1987 八千代出版
- 44) 岸田元美・細田和雅 編 「教育心理学」 1985 ナカニシヤ出版
- 45) 岸本 弘・柴田義松 編著 「教育心理学」 1985 学文社
- 46) 岸本 弘 編著 「教育心理学(ポイント教育学)」 1986 学文社
- 47) 北尾倫彦 編 「子どもの心理と教育」 1985 創元社

- 48) 北尾倫彦・速水敏彦 著 「わかる授業の心理学—教育心理学入門」 1986 有斐閣
- 49) 小林 進・末田啓二・藤本浩一ほか 著 「教育心理学の基礎」 1989 啓文社
- 50) 小林利宣 編 「教育心理学—中学・高校教育課程—」 1981 朝倉書店
- 51) 小林利宣 編著 「新教育心理学図説」 1986 福村出版
- 52) 小西秀勇 編著 「教育心理学概論」 1986 北大路書房
- 53) 久保松喜信 著 「教育心理学提要（増補版）」 1982 日新出版
- 54) 倉戸ヨシヤ 編 「教育心理学序説」 1982 学術図書出版社
- 55) 久世敏雄・大橋正夫・長田雅喜 編 「入門教育心理学」 1980 福村出版
- 56) 久世敏雄 編 「教育の心理」 1988 名古屋大学出版会
- 57) 教育行動研究会 編 「要説教育心理学」 1986 ナカニシヤ出版
- 58) 教師養成研究会教育心理学部会 編著 「新教育心理学」 1981 学芸図書
- 59) 正田 亘・松平信久 編著 「教育心理学」 1981 晃洋書房
- 60) 松浦 宏・中島 巖・松村暢隆・水野正憲ほか 著 「学校教育のための心理学」 1989 福村出版
- 61) 松浦健児・佐藤夏生・手島茂樹 著 「教育心理学」 1984 八千代出版
- 62) 松山安雄・倉智佐一 編著 「現代教育心理学要説」 1980 北大路書房
- 63) 宮坂琇子 著 「教育実践のための心理学—教育心理学入門—」 1981 学術図書出版社
- 64) 森 重敏 編著 「教育心理学」 1981 同文書院
- 65) 森正義彦 編 「教育心理学要論」 1986 有斐閣
- 66) 森本佳信 編 「図表による教育心理学データ」 1985 大阪教育図書
- 67) 村中兼松 編著 「現代の教育心理学」 1981 八千代出版
- 68) 村瀬隆二 編 「教育実践のための教育心理学」 1989 新曜社
- 69) 永野重史・岸井勇雄 編 「教育心理学」 1987 チャイルド本社
- 70) 内藤哲雄・島崎 保 編著 「人と人のかかわりとしての教育心理学」 1988 福村出版
- 71) 永沢幸七 著 「人間形成の教育心理学」 1985 北樹出版
- 72) 中西信男・松浦 宏・内山武治・関 昶一 編著 「教育心理学」 1985 日本文化科学社
- 73) 中澤次郎 編 「現代の教育心理学—人間性開発のための教育心理学—」 1980 学術図書出版社
- 74) 浪花 博・杉田千鶴子・鶴飼信行 編著 「教育心理学」 1986 佛教大学通信教育部
- 75) 浪花 博・鶴飼信行・杉野欽吾 共著 「教育心理学」 1986 八千代出版
- 76) 成田錠一・水山進吾 編 「教育心理学（保育叢書）」 1980 福村出版
- 77) 成田錠一 編著 「児童・生徒教育心理学」 1983 北大路書房
- 78) 成瀬悟策 監修 「教育心理学」 1987 小林出版
- 79) 能見義博 編著 「教育心理学序説」 1988 八千代出版
- 80) 大黒静治 編著 「教育心理学」 1987 福村出版
- 81) 大淵憲一・石田雅人 編著 「学習指導の心理学」 1989 ぎょうせい
- 82) 岡林桂生 編著 「教育心理学」 1981 協同出版
- 83) 斉藤幸一郎・並木 博 編 「教育心理学—個に帰する教育のために—」 1986 慶應通信
- 84) 佐藤壽郎 編著 「教育心理学」 1982 八千代出版
- 85) 関 忠文・大村政男 編著 「新教育心理学」 1982 福村出版
- 86) 関 忠文・大村政男・岡村一成 編 「教育心理学セミナー」 1988 福村出版
- 87) 関口茂久・近藤文良 編著 「発達と学習の心理学」 1987 ブレーン出版
- 88) 柴崎正行・無藤 隆 編 「教育心理学（保育講座）」 1989 ミネルヴァ書房
- 89) 重久 剛 著 「人間の心理と教育—人と人との間の心理学—」 1982 八千代出版
- 90) 篠置昭男・中西信男・乾原 正 共編 「実践教育心理学」 1980 学術図書出版社

- 91) 篠置昭男・乾原 正 編著 「人間形成を考える－教育心理学入門－」 1985 福村出版
- 92) 塩見邦雄 編 「教育心理学」 1984 ナカニシヤ出版
- 93) 白佐俊憲 著 「教育心理学基本テキスト（新版）」 1986 川島書店
- 94) 舩地三郎 監修 「立体的・多角的に学べる新教育心理学」 1987 ナカニシヤ出版
- 95) 渋谷憲一 編著 「教職教養 教育心理学」 1984 樹村房
- 96) 末田啓二・那須光章 編 「教職のための教育心理学」 1983 学術図書出版社
- 97) 杉原一昭・海保博之 編著 「事例で学ぶ教育心理学」 1986 福村出版
- 98) 杉田千鶴子・島 久洋 編著 「人の成長をひきだすもの・さまたげるもの－子どもと親・生徒と教師の心理学－」 1982 ミネルヴァ書房
- 99) 杉田千鶴子・島 久洋・島山平三 編著 「教えと育ちの心理学」 1989 ミネルヴァ書房
- 100) 高嶋正士・山本多喜司・山内光哉 共著 「現代教育心理学（改訂増補版）」 1986 芸林書房
- 101) 滝沢武久・富田達彦 著 「教育心理学新講」 1986 学文社
- 102) 詫摩武俊 編 「基礎教育心理学（基礎心理学講座Ⅱ）」 1989 八千代出版
- 103) 田中敏隆 編 「教育心理学入門」 1980 協同出版
- 104) 辰見敏夫・木村 裕 編 「要説 教育心理学」 1985 実務教育出版
- 105) 辰野千寿 著 「教室の心理学」 1985 教育出版
- 106) 辰野千寿 編 「教育心理学」 1986 山文社
- 107) 東京都私立短期大学協会 編 「新版 教育心理学」 1983 酒井書店・育英堂
- 108) 富本佳郎・古厩勝彦 編著 「教育心理学」 1983 福村出版
- 109) 氏原 寛・倉戸ヨシヤ・東山紘久 編 「臨床教育心理学」 1983 創元社
- 110) 梅本堯夫 編著 「教育心理学（教職心理学講座）」 1981 第一法規
- 111) 梅本堯夫 編 「教育心理学の展開」 1985 新曜社
- 112) 梅津耕作・大久保康彦・大島貞夫・袴田 明 共著 「教育心理学入門－臨床心理学的アプローチ」 1989 サイエンス社
- 113) 山崎 正・對馬 忠 編 「現代教育心理学」 1982 ナカニシヤ出版
- 114) 山崎喜直 著 「教育心理学入門」 1986 北樹出版
- 115) 横島 章・澤田瑞也 編著 「教育心理学（実践教育課程講座Ⅱ）」 1987 日本図書センター
- 116) 吉田辰雄 編著 「学校教育心理学」 1981 福村出版

〈参考文献〉

- 1) 藤田主一 1990 心理学教科書とP－Fスタディ 城西大学女子短期大学部紀要, 7, 1, 129－140.
- 2) 花沢成一 1986 P－Fスタディ パッケージ・性格の心理, 6, 111－124, ブレーン出版.
- 3) 秦 一士 1987 日本におけるP－F Studyの研究——文献目録—— 甲南女子大学人間科学年報, 12, 73－92.
- 4) 林 勝造 1985 ローゼンツァイク P－Fスタディ 精神科MOOK, 10, 77－88, 金原出版.
- 5) 一谷 彊 1987 我が国における心理検査利用の現状と課題 京都教育大学紀要, Ser. A, No.71, 1－29.
- 6) 大村政男・花沢成一・佐藤 誠 1985 新訂・心理検査の理論と実際, 駿河台出版.
- 7) 住田勝美・林 勝造・一谷 彊 1964 ローゼンツァイク 人格理論, 三京房.
- 8) 住田勝美・林 勝造・一谷 彊ほか 1987 P－Fスタディ解説－1987年版－, 三京房.

〈付録〉

筆者のP－Fスタディ研究のうち、主要なものをあげれば次のとおりである。

- (1) 藤田主一・高橋秀和 1983 P-F スタディの場面展開性に関する研究——(2)児童用場面18および場面21の分析—— 日本応用心理学会第50回大会発表論文集, 24.
- (2) 藤田主一・高橋秀和 1984 P-F スタディの基礎的過程に関する研究 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 454—455.
- (3) 高橋秀和・藤田主一 1985 P-F スタディの場面展開性に関する研究——(3)児童用場面5および場面13の分析—— 日本心理学会第49回大会発表論文集, 441.
- (4) 藤田主一・高橋秀和 1985 P-F スタディの場面展開性に関する研究——(4)児童用場面6および場面8の分析—— 日本心理学会第49回大会発表論文集, 442.
- (5) 藤田主一・駒崎 勉・大村政男・高橋秀和 1985 P-F スタディ母—子場面における母親の期待水準 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 436—437.
- (6) 藤田主一 1986 P-F スタディ母—子場面における母親の期待水準に関する比較研究 城西大学女子短期大学部紀要, 3, 1, 57—70.
- (7) 藤田主一 1986 P-F スタディ母—子場面における子どもの期待水準 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 428—429.
- (8) 藤田主一 1987 P-F スタディに現われた不明確語の研究——特に「なんで」反応の意味と解釈について—— 日本心理学会第51回大会発表論文集, 575.
- (9) 藤田主一 1987 フラストレーション場面对する母—子相互認知の方向性——特にP-F スタディ母—子場面について—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 544—545.
- (10) 藤田主一 1988 P-F スタディにおける意識水準の検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, 129.
- (11) 藤田主一 1988 フラストレーション場面对する母—子相互認知の方向性II——特にP-F スタディ母—子場面について—— 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 444—445.
- (12) 藤田主一 1989 欲求不満場面における子どもの役割期待に関する研究——特にP-F スタディ母—子場面について—— 城西大学女子短期大学部紀要, 6, 1, 115—133.
- (13) 藤田主一 1989 フラストレーション場面对する母—子相互認知の方向性III——特にP-F スタディ母—子場面について—— 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 214.
- (14) 藤田主一 1989 心理学教科書に扱われたP-F スタディの諸相 日本心理学会第53回大会発表論文集, 143.
- (15) 藤田主一 1990 心理学教科書とP-F スタディ 城西大学女子短期大学部紀要, 7, 1, 129—140.
- (16) 藤田主一 1990 心理学教科書に扱われたP-F スタディの諸相II 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, 269.